

Title	<上>が<下>の反義でなくなる時：日本語複合動詞における後項動詞
Sub Title	Semantic analysis of Japanese Verb + Verb with UP, DOWN and OUT
Author	川北, 直子(Kawakita, Naoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1997
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.72, (1997. 6) ,p.178(111)- 196(93)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00720001-0196">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00720001-0196</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 〈上〉が〈下〉の反義でなくなる時： 日本語複合動詞における後項動詞

川北 直子

## 0. はじめに

日本語複合動詞における後項動詞に、〈上〉・〈下〉という空間概念を含む用法が多く見られる。

- (1) 持ち上げる, 立ち上がる, 申し上げる, 書き上げる, 仕上がる
- (2) つり下げる, 飛び下がる, 引きずりおろす

これらの動詞はみな、それぞれ独立して用いることのできる2つの動詞から成っており、これらの構造をまとめて「動詞1+動詞2 〈上/下〉」として表すことにする。動詞2に含まれる上/下という概念は、反対の意味を表す概念として当然のように考えられているが、実際に対立した概念があるというとき、その背後には共通した意味的領域があり、その領域にある同じスケール上の両極にそれぞれの概念があるために2者が対立している、といえるのである。この場合、最も中心的な意味領域は物理的空間であり、水平線から垂直に伸びた連続体をスケールとした両極がUPとDOWNに当たる。ところが、データを観察すると、同じ動詞+動詞〈上/下〉の分布にはかなりの不均衡が見られる。

(3) 日本語：	動詞1+動詞2 〈上〉	動詞+動詞2 〈下〉	
	動詞+ ~上げる 96	動詞+ ~下げる 15	
		動詞+ ~下/降ろす 15	

			動詞+ ~下す	10
動詞+	～上がる	59	動詞+ ~下がる	9
動詞+	～上る	19	動詞+ ~下/降りる	2
計		174		51

(逆引き広辞苑より)

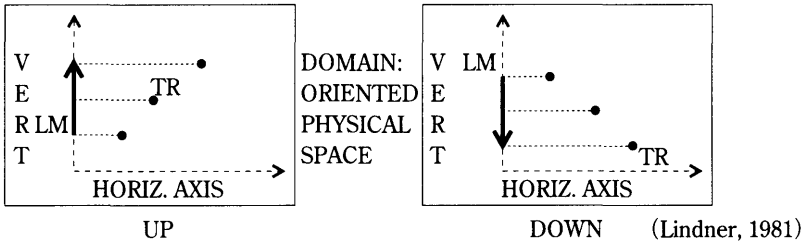
また、共通の動詞1をもつ〈上〉〈下〉のペアにおいても、必ずしも対立した意味を表すケースばかりではないし、むしろ両極的な意味対立を表す場合の方が少ないように思われる。それではなぜ、共通の動詞1を含む「動詞+動詞〈上〉」と「動詞+動詞〈下〉」という動詞句は反義語とならないのであろうか。

本稿では、特に〈上〉の概念を含む複合動詞を中心に、動詞2の意味派生について分析し、どこでそのような不均衡が生じてくるのか考察していく。動詞2は、文字通り空間的意味を表す中心的意味用法から、空間的意味が失われた拡張的意味用法へと派生する。次節より、それぞれの意味構造を図を用いながら記述し、意味派生を主に領域変換と、それに伴ういくつかのメタファーによって説明する。また、複合動詞の中では〈上〉～〈下〉という本来の対立関係が、特に動詞2の拡張が進むにつれ崩れることを示し、その動機についての説明を試みる。

## 1. 英語をデータとした先行研究から日本語の分析へ

英語動詞句活用辞典(1982)では、動詞+UPと動詞+DOWNの意味用法について記述的に分類している。また、Lindner(1981)は、動詞句における空間を表す不変化詞について、通常当然のように反意語として見なされるUP/DOWN, IN/OUTが、必ずしも動詞句内の分布において単純に予測できないことから、動詞-不変化詞構造(VPC)における‘up’/‘down’/‘in’/‘out’の意味分析を認知言語学的視点から行っている。Lindnerは、UP/DOWNの典型的な例を(4)のように図示している。

(4) UP と DOWN の典型的用法



また、拡張的な領域における UP については、再帰的 (Reflexive) UP と行為完了 (Completive) UP と呼び、いずれも動詞+UP の対極にある用法の一部を、動詞+DOWN でなく動詞+OUT が担っている、と指摘している。日本語複合動詞における行為完了 <上> では、英語と類似した現象が見られる。Lindner の分析では、英語複合動詞における UP/DOWN/OUT の分布について詳しく分析し、まとめているが、拡張用法の動詞+UP の対極の意味用法に動詞+DOWN が用いられない理由については、あまり説明されていない。拙稿では、日本語にも存在するこの不均衡について、<上> と <下> を含む複合動詞の意味構造の違いと日本語文化における可能な概念、という観点から説明を試みる。

Lakoff and Johnson (1980) は、UP-DOWN メタファーと文化の関連性について、次のように述べている。

(5) The most fundamental values in a culture will be coherent with the metaphorical structure of the most fundamental concepts in the culture. ... Not all cultures give the priorities we do to up-down orientation. ... In general the major orientations up-down, in-out, central-peripheral, active-passive, etc., seem to cut across all cultures, but which concepts are oriented which way and which orientations are most important vary from culture to culture.

Lakoff and Johnson (1980, 22-24)

また Lakoff and Johnson は、著者の言語（英語）文化に根付く UP-DOWN メタファーの例として、MORE IS UP/GOOD IS UP/THE FUTURE IS UP/HIGH STATUS IS UP を挙げている。また、同じ英語文化でも、下位文化や集団・個人・時代によってもこれらの方向性は変わりうる、と述べている。該当する日本語と英語の「動詞+動詞〈UP/DOWN〉」構造の大きな違いは、英語の UP/DOWN が不変化詞であるのに対し、日本語の該当要素は、「上がる」、「上げる」、「上る」、「下がる」、「下げる」、「下る」、「下りる」のように、本動詞として使われうることである。従って、日本語においては〈上〉〈下〉の概念を受け持つ要素も、時制や他動詞・自動詞としての性質を備えている。次節では、実際に日本語の複合動詞の例を分類し、それぞれの形式の分布、意味派生について分析していく。

## 2. 動詞1+動詞2〈上〉と動詞1+動詞2〈下〉について

### 2.0 中心的意味用法

#### 2.0.0 UP-1：物理的空間領域における上昇・上向

まず、UPの典型的意味「物理的空間における上昇・上向」を含む複合動詞を例示する。

(6) Vt+Vt {UP}：つり上げる、持ち上げる、引き上げる、打ち上げる

Vt+Vi {UP}：つり上がる、持ち上がる、引き上がる、打ち上がる

Vi+Vt {UP}： -

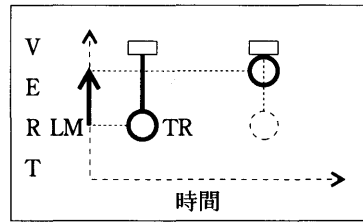
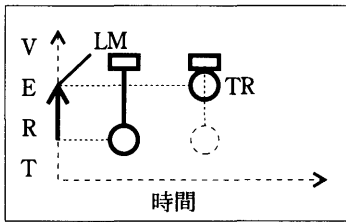
Vi+Vi {UP}：飛び上がる、立ち上がる、駆け上がる、起きあがる

動詞1が自動詞である場合、「飛び上げる」、「駆け上げる」、といった他動詞である動詞2との組み合わせは成立しないようである。一方、「他動詞+上がる」の組み合わせが成り立つのは、行為による結果状態を「上がる」によって表すことができるためである。

(7) 「つり上げる」

「つり上がる」

(例：クレーンで荷物をつり上げる) (例：クレーンで荷物がつり上がる)



両者の違いは、行為主体者の関与が焦点化されているか否かである。「つり上げる」の軌跡は、対象物を上方移動させるという行為者による行為過程であり、「つり上がる」の軌跡は、行為者の働きかけによって生じる結果的出来事としての対象物の上方移動である。構造図中の軌跡 (TR) と行為者の関係は形式によって若干異なる：「持ち上げる」「持ち上がる」では、行為者は LM の位置にいる。また、「飛び上がる」タイプの「～上がる」の意味構造では、TR は行為者自身の軌跡である。

### 2.0.1 DOWN-1：物理的空間領域における下降・下向

次に、前節の複合動詞と共通した動詞 1 と〈下〉の中心的概念（空間領域における下降・下向）を表す動詞 2 との組み合わせである複合動詞の分布を下に示す。

(8) Vt+Vt {DOWN}：つり下げる，\*持ち下げる，?引き下げる，  
\*打ち下げる  
つり下ろす，\*持ちおろす，引き下ろす，打ち下ろす

Vt+Vi {DOWN}：つり下がる，\*持ち下がる，?引き下がる，  
\*打ち下がる

Vi+Vt {DOWN}： —

Vi+Vi {DOWN}：?飛び下がる，\*立ち下がる，\*駆け下がる，

\*起き下がる

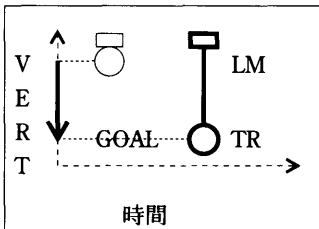
飛びおりる, \*立ちおりる, 駆け下りる, \*起きおりる

例を見ると、「つり上げる/つり下げる」のように動詞+UPと動詞+DOWNが両方分布し、ほぼ対立していると母語話者によって直観的に感じられる例と、そうでない例があることがわかる。\*付の語彙は、分布が欠落していることを示しており、?は、語彙としては存在するが、対応する動詞+UPの意味とは対立関係に感じられないことを示している。まったく分布が欠落している例については、その要因として動詞1の意味が動詞2の概念と両立しえないことが考えられる。また、行為の自発性の程度によって「下げる」「下がる」「下りる」「降ろす・下ろす」などのように相補的に分布するものや、形式によって意味が異なったりするものがある。同じ「上」「下」の概念を表す複数の形式分布についてはここではあまり詳しく扱わないが、これらの形式全体でひとつの空間概念を表すため、考慮する必要がある。

また、「つり上げる」と「つり下げる」のような例にしても、「～上げる」と「～下げる」が全く上下対称を成すというわけではない。(7)の「～上がる」「～上げる」の意味構造と比較する為、「つり下がる」と「つり下げる」の例について、意味構造図を示すと次のようになる。形式による変種については、2.0.0のUP-1と同様である。

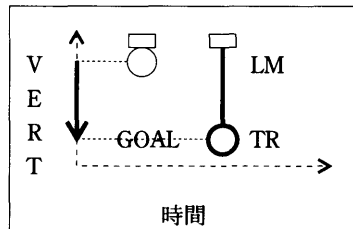
(9) 「～下げる」

(例：重りをつり下げる)



「～下がる」

(例：重りがつり下がる)



「～上げる」は、行為者による対象物の上方移動過程を表し、TRとLMを結ぶ関係は動的なものであったが、「～下げる」は、行為者による対象物の下方移動の結果状態を表し、TRとLMを結ぶ関係は静的なものである。また、「～上がる」は、行為者による働きかけの結果、対象物が上方移動する過程を表し、行為者には焦点が置かれませんが、TRとLMの関係は動的であった。一方で「～下がる」は、行為者の働きかけの結果、対象物が下方移動した結果状態を表し、やはり行為者には焦点が置かれませんが、TRとLMの関係は静的である。このように典型的用法における共通した動詞1をとる「～上げる」/「～下げる」、「～上がる」/「～下がる」の組み合わせでもよく観察すると必ずしも正反対の意味をとるものばかりではない。

さらに「～下がる」「～下げる」については、「～上がる」「～上げる」と異なり、比較的大きな派生的概念がすでに見られる。つまり、最も中心的な物理的空間領域における用法でも、これらが〈下〉を表さない場合があるのである。

#### (10) 飛び下がる, 引き下がる, 引き下げる

複合動詞以外にも、「一步下がる」というように、〈後〉の概念を表す「下」が観察される。一方、「～下りる」「～下ろす」は、少なくとも物理的空間領域における用法では〈下〉という概念でしか用いられない。同じ概念をもつ複数の形式が重複して分布する場合、意味用法、役割が分散することは自然なことであるが、ここで重要なのは、日本語では「後ろは下である」というメタファーがすでに働いているということである。後退を表す「下」については、後節の対人相互的領域への変換の際、より顕著な例として扱うことにする。

## 2.1 非物理的空間領域への領域変換と拡張的用法

### 2.1.0 UP-2: 心的領域における上昇・上向



次のような複合動詞における「～上がる」「～上げる」は、構造的にはUP-1にみた基本的用法と類似している。

(11) (観客が) 沸き上がる, のぼせ上がる, (女性に) 入れ上げる

この場合の「～上がる」「～上げる」は、UP-1と異なり、物理的空間における上昇ではない。いわば心的空間における上昇、といえる。意味構造は基本的にUP-1の場合と同じであるが、物理的空間領域から非物理的空間領域へと領域変換が行われているのである。

### 2.1.1 DOWN-2: 心的領域における下降・下向

逆引き広辞苑では、心的領域に関わる「～下がる」「～下げる」の用例は見られなかった。母語話者として耳にする例として、次のような表現があげられる程度で、生産性はかなり低いと思われる。

(12) 盛り下がる, 盛り下げる (例: 場の雰囲気を持ち下げる)

### 2.1.2 UP-3: 社会的領域における上昇・上向

この意味拡張も、物理的空間から非物理的空間(社会的空間領域)への領域変換によってなされるものである。用例のみ挙げておく。

(13) のし上がる, (困難な世界で) 這いあがる, 成り上がる  
(ある地位に) 押し上げる, (失敗した部下を) 救い上げる, たたき上げる

### 2.1.3 DOWN-3: 社会的領域における下降・下向

UP-3同様、物理的空間から非物理的空間(社会的空間領域)への領域変換が意味拡張に関わる。用例は以下のようなものである。

(14) (トップの座から) 引きずり下ろす, 成り下がる, (権威に) ぶら下がる

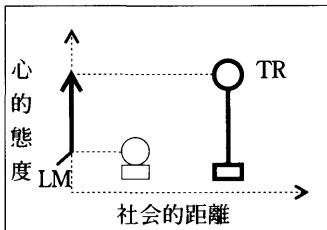
#### 2.1.4 UP-4: 対人的領域における上昇・上向

相手との相互関係において〈上〉〈下〉の概念が関与するとき、話者から相手への行為、または相手の行為に対してもこれらの概念を含む動詞を付加することによって、互いの相対的位置を明らかにすることがある。このような意味領域を対人的領域と呼ぶことにする。代表的な例は日本語に特徴的な敬語に見られるが、例えば英語には見られない。

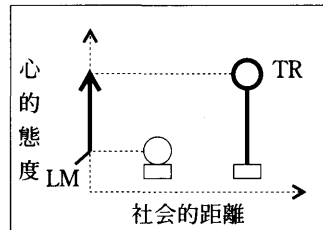
(15) 召し上がる, 申し上げる, 差し上げる

いわゆる尊敬語・謙譲語における「～上がる, ～上げる」は、次のように構造図化できる。

(16) 「～上げる」



「～上がる」



DOMAIN:  
対人的  
領域

この場合、LM は話者の相対的な心的位置、TR は対象者の相対的な心的位置を表す。横軸は、話者からみた社会的距離（例えば先生と生徒、親子、先輩と後輩など）を表しており、対象者と主体者の相対的地位や力関係の差が尺度となっている。「～上げる」は、話者が対人関係において+の地位や力関係をもつ対象者に対して行為を行うことを示しており、「～上がる」は TR が話者に対して+の位置づけにある場合、TR が行為主体者であることを示している。

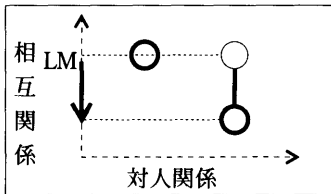
### 2.1.5 DOWN-4: 対人的領域における下降・下向

対人関係において、相手のもとから対象事物または主体者自身を行為者のもとに物理的、あるいは非物理的に後退させるとき、次のように動詞2<下>が用いられる。

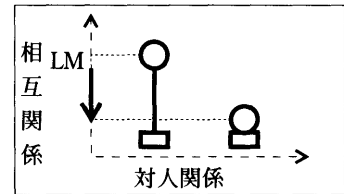
(17) (議論で) 引き下がる, (品物を) 引き下げる, (提案を) 取り下げる

対人的領域における「～下がる」, 「～下げる」は、これまでの「下降・下向」の概念を全く失い, 「後退」の意味が中心となる。意味構造図は次のようになる。

(18) 「～下がる」



「～下げる」



「～下げる」は、行為者が行為対象物を相手の所から後退させることを表す。また「～下がる」は、行為者が相手の位置から後退することを表す。ここで起こる変換は、ひとつは「下方」という軌跡の方向性を全く失った移動になるという点である。もっとも、先に述べたように、物理的空間領域における典型用法でも「後ろに下がる」という表現があるように、日本語の「～下がる」, 「～下げる」は後退の意味を含んでいるので、対人的領域に変換されていきなり起こる現象ではない。徐々に「下」→「後」の変換の度合いが増えてくるのであって、意味変化を境界できれいに切ることはいできないのである。

対人的領域におけるもう1つの用法として、相手の心的位置を低めるものがある。

(19) 見下す, 見おろす (例: 相手を見おろした態度)

ここで挙げた「下」は、意味構造的には2.1.2で扱った敬語における「上」とある意味では反意的であり、相手の心的位置を低める機能を果たしている。が、異なる点は、(15)の「上がる」「上げる」は、話者と相手の関係づけをおこなう機能を果たしていたが、(19)の「下」は話者の相手に対する行為過程そのものを表している、ということである。

### 2.1.6 UP-5: 行為遂行領域における上昇・上向

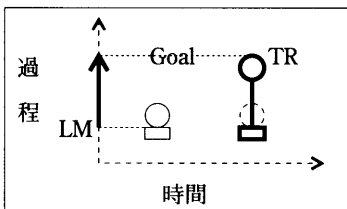
次のような複合動詞における「～上がる」, 「～上げる」からは、空間・方向といった基本的概念が失われ、「行為を完了する」という意味をもつ。

(20) 書き上げる, 走り上げる

干上がる, 煮え上がる, 仕上がる

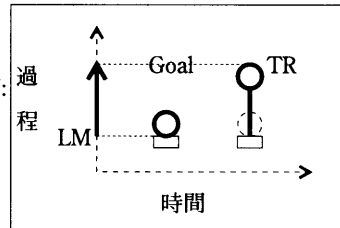
〈上〉から〈完了〉への意味派生においては、物理的空間領域から行為遂行領域へと領域変換がなされると同時に、「多は上である」というメタファーが働いている。意味構造を下の図のように表すことができる。

(21) 「～上げる」



DOMAIN:  
行為・  
出来事

「～上がる」



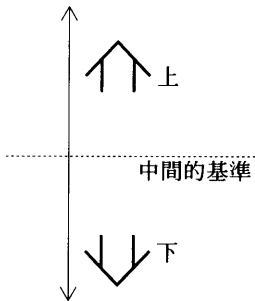
「～上げる」は、行為主体者が、行為対象物に対してある目的の行為を完了させる行為遂行過程を表している。一方「～上がる」は、行為主体者が

対象事物に対して行為を遂行完了した結果、対象物が目標地の状態まで達することを表している。

日本語本動詞としての「上がる」、「上げる」の対義語は「下がる」、「下げる」であるし、典型的用法では少なくとも〈上〉〈下〉が反義的に分布した例が多くみられることは前節で述べた通りであるが、「干上がる」、「煮え上がる」に対して「干下がる」、「煮え下がる」という語彙はないし、「書き上げる」、「仕上げる」に対し、「書き下げる」、「仕下げる」という用法はない。一方、「煮え出す」、「書き出す」、「仕出す」のように〈外〉の概念を含む動詞が「～し始める」の意味で頻繁に観察され、意味的にも複合動詞「～上げる」「～上がる」に対立しているように思われる。そこでまず起こる疑問は、なぜこの場合動詞〈下〉の対応形式が存在しないのか、ということである。

下に示した〈上〉と〈下〉の反義の意味関係というのは、「大きい」「小さい」、「高い」「低い」のように、ある中間的基準の存在を前提として、尺度上に渡された2つの極または末端である。

## (22) 両極対立的反義関係



両極対立においては、「かなり上」「かなり下」、「少し上」「少し下」という表現が可能で、尺度上の末端におかれればおかれるほど反義性が強まる。空間的、時間的な領域においては、このような両極的な概念対立が自然に認知されるが、行為遂行領域に領域変換されたとき、行為がこのよう

な両極に向かう，というような概念分布というのは日常的に認知されない。行為はあくまでも目標達成・完了に向けての1方向性のものであり，逆効果などという負の行為結果もまた [+行為] なのである。このように，行為遂行領域において動詞〈下〉を後項に含む複合動詞は，少なくとも日本語文化においては言語化しえない，と考える<sup>(1)</sup>。

それでは，「書き上げる」タイプの「～上げる」と「書き出す」タイプの「～出す」は，反義であるといえるのであろうか。そのことを論じる前に，動詞〈外〉の意味構造についてふれておく。

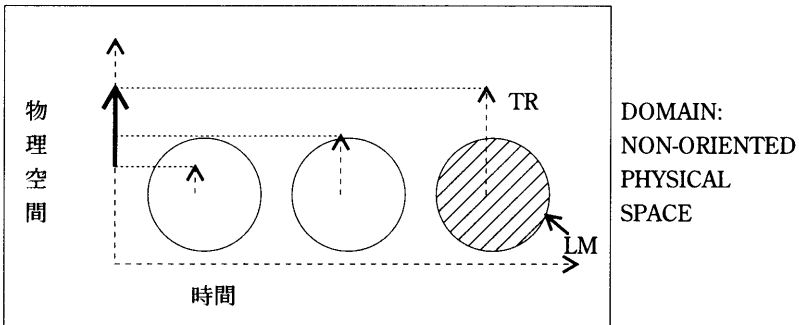
## 2.2 後項動詞 {外} について

複合動詞における「～出す」の中心的例は〈外〉の概念を表す。

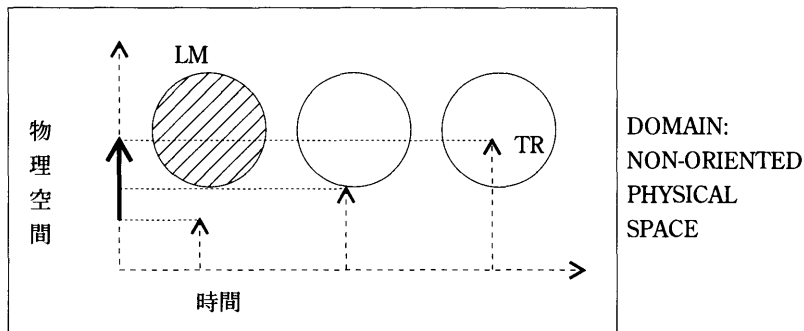
- (23) 空間領域における外方移動：取り出す，持ち出す，押し出す，抱え出す，飛び出す，這い出す，張り出す  
 にじみ出る，飛び出る，溢れ出る，這い出る

この用例には，大きく2通りの意味構造が考えられる。

- (24) OUT-1：押し出す，抱え出す，持ち出す，飛び出す，這い出す<sup>(2)</sup>



- (25) OUT-2：にじみ出す，飛び出す，這い出す



(24) は、ある境界 LM 外に対象事物が移動する過程を表し、(25) は、対象事物が LM 境界内へ出現する過程を表している。(24) と (25) の意味構造は、同一の複合動詞の形式によって表されることが多い。例えば、

(26) 鎖から離すやいなや、犬は庭から飛び出し、帰ってこなかった。

(27) 森の中から熊が飛び出したので、私は立ちすくんでしまった。

といった例文を見ると、同じ「飛び出す」という複合動詞でも (26) の「～出す」は OUT-1 の意味構造を持ち、(27) の「～出す」は OUT-2 の意味構造を持つことがわかる。

以上の例は、物理的空間における移動を表すが、領域を非物理的空間へと変換すると、次のような例がカバーされる。

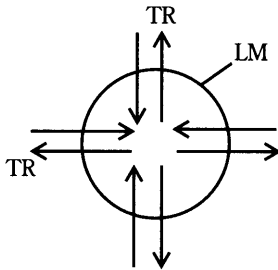
(28) 思い出す、考え出す、映し出す、見出す、浮き出す、聞き出す、さらけ出す

(28) に分類した例における「～出す」は、物理的空間を移動する意味を持たない。細かく意味を分析すると、すべての「～出す」が全く同じ意味をもつわけではなく、微妙なズレは存在するものの、分類すると、非物理的空間領域における同一構造として捉えることが可能である。例えば、「思い出す」の「～出す」は、ある対象事物が心へ出現する様を表現して

おり、この場合の領域は物理的空間に対して心的空間と呼べるであろう。意味構造としては「～出す」-2と類似していると考えられる。また、「映し出す」の「～出す」は、ある対象事物が視覚的に、または心的に出現する意味タイプである。この例も意味構造的には「～出す」-2と類似しており、領域はやはり心的空間に含まれる、と考えてよいであろう。

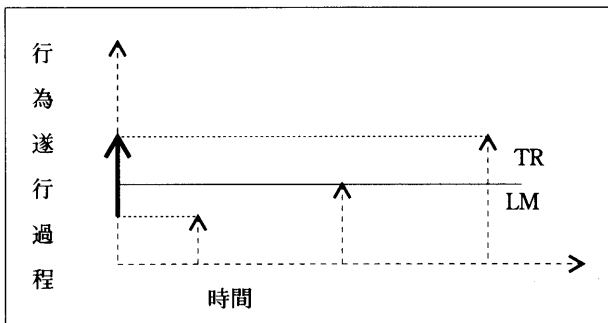
以上のように、動詞〈外〉は、動詞〈上〉や動詞〈下〉と異なり、方向性は特定されない。その結果、方向的規制が少ないため、比較的自由に生じやすいことが推測される。記述の便宜上、上の構造図においては軌跡を1方向に表したが、動詞〈外〉の構造をまとめると次のようになる。

(29) 動詞〈外〉の意味構造



次に、問題となっている「開始」の「～出す」についてその構造を考察する。

(30) OUT-3: 駆け出す, 走り出す, 歩き出す, 食べ出す, 降り出す<sup>(3)</sup>



DOMAIN:  
行為遂行



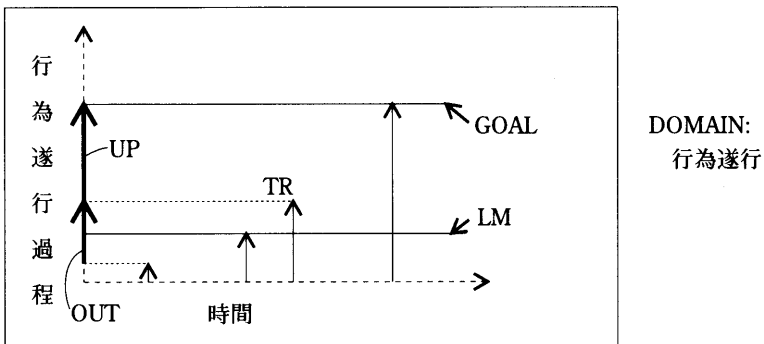
この場合、LMは行為ゼロ地点、つまり起点となる。これまでのOUTの意味構造とLMのイメージが異なるように見えるが、(29)の構造はここでも成立しており、行為開始前という容器の中と、行為開始後という容器の外とを分ける境界となっている。

### 2.3 完了の〈上〉と開始の〈外〉について

それでは、完了の〈上〉と開始の〈外〉の関係について考察することにする。

完了の〈上〉と開始の〈外〉を同じイメージスキーマ上においてみると、次のようになる。

#### (31) 〈外〉と〈上〉の関係



行為遂行に関わる〈上〉と〈外〉における軌跡は、行為完了地点を示すGOALを終端点とする同一線上にある。2つの拡張的概念は縦軸の両極にあるが、その方向性は反対向きでなく同一方向を向いている。何をもって反義的概念と呼ぶかは、さらに根本的な語彙関係についての問題となるが、少なくとも〈上〉と〈外〉の関係というのは〈上〉と〈下〉の関係のような両極対立とは異なり、典型的な反義関係とはいえない。動詞+動詞〈上〉に対立する動詞+動詞〈下〉が行為遂行領域の用法においてみられないことは前にふれた通りであるが、動詞+動詞〈上〉の最も反義的存在

に近い意味構造が動詞+動詞〈外〉によって生産されるのは、〈外〉のもつ方向不特定性からくるものであると思われる。

### 3. 結び

本稿では、〈上〉（「～上がる」・「～上げる」）を含む複合動詞を中心に、これらの複合動詞内における意味拡張について考察し、特に行為遂行領域における拡張の意味と、同じ行為遂行領域における〈下〉（「～下がる」・「～下げる」）や〈外〉（「～出す」・「～出る」）の拡張の意味との関係について構造的に説明を試みた。

複合動詞における〈上・下・外〉といった空間概念の意味拡張においては、次のような領域変換といくつかのメタファーが関わっている。

(32) 物理的空間領域から非物理的空間領域へ：

心的空間領域，社会的領域，对人的領域，行為遂行領域<sup>(4)</sup>

(33) 後は下である

感情は高さである

力関係は高さである

多は上である

また、〈上〉と〈下〉という概念は本来反義関係にあるが、特に行為遂行領域における完了の「上」は、分布においても意味構造においても対応する「下」を持たず、かわりに〈開始〉を表す「外」が対立概念として分布しているように見える。これは、〈下〉のもつ方向特定性が、日本語において行為遂行に関わる動詞との共起を難しくすること、それに対して、〈外〉の方向不特定性が、そのような動詞との共起を比較的自由にすることが要因として考えられる<sup>(5)</sup>。

日本語の中には、この他にも、漢字熟語である「参上，向上，落下，沈下，脱出，進出」といった空間・方向を表す漢字が含まれたものが多くみ

られる。その場合の意味構造が複合動詞の場合と異なるのか、また複合動詞の中でも形式の差異による意味構造の違い、そしてそれぞれの概念の対応関係など、今後詳しく分析する必要がある。また、Lindner の研究で扱われたように、英語にも「動詞+不変化詞 {UP/DOWN/OUT/IN}」といった類似した動詞句が存在するし、他言語にも匹敵する形式が多く見られる。文化によってそれぞれの意味派生が異なったり、文化を超えて共通する概念が存在したりすることが推測されるので、言語文化とこれらの概念がカバーする範疇などの相関関係についての問題は今後議論していくことにする。

#### 注

- (1) 行為遂行完了の動詞+UP は英語にも存在し、やはり日本語と同様、動詞+DOWN との反義的分布が見られない。さらに、動詞+OUT によって動詞+UP の対立的意味を示すことが Lindner によって言及されている。この点で、UP と OUT の関係は日本語・英語において共通している。ただし、日本語と大きく違う点は、break up/break down のように、行為遂行領域において up, down が類似した意味ともとれる組み合わせが見られることである。英語についての観察は別の紙面にて今後論じることにして、ここでは立ち入らないことにする。
- (2) ここでは、開始の動詞「～出す」の意味構造を説明する為の予備記述であり、行為遂行領域において「～出る」の用例は見つからないため、分析は「～出す」に限定する。また、構造図において他動詞と自動詞の別は省略してあるが、実際には地と図の関係によって区別されるものである。
- (3) 「降り出す」のような例は行為遂行とは異なるが、ここでは自発的行為から出来事を含めた広い意味での動的過程のことをカバーする用語として行為遂行と呼んでいる。
- (4) ここではあくまでも意味派生を共時的に観察しており、議論の中で便宜的に付した番号も派生順序を特定するものではない。
- (5) 英語の動詞+DOWN の行為遂行領域における分布についての説明は、日本語のものとは区別すべきである。これは、日本語の〈下〉が後項動詞であり、英語の DOWN は不変化詞であることに関係があり、英語の動詞+DOWN は異なる意味構造を示す、と考える。

## 参考文献

- 岩波書店編集部編 1992. 「逆引き広辞苑」 東京：岩波書店
- 多田幸蔵 1982. 「英語動詞句活用辞典」 東京：大修館
- 山梨正明 1995. 「認知文法論」 東京：ひつじ書房
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, George, 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol. 1, Stanford: Stanford University Press.
- Lindner, Susan. 1981. "A Lexico-semantic Analysis of English Verb Particle Constructions with OUT and UP." Ph. D. dissertation, University of California, San Diego.
- Lindner, Susan. 1983. "What Goes Up Doesn't Necessarily Come Down: The Ins and Outs of Opposites." *Papers from the 19th Regional Meeting of Chicago Linguistic Society*. Chicago: Chicago Linguistic Society, 305-323.